

タイ語文献について (3)

—Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin—

石 井 米 雄

(1) 「Ratanakosin 王朝年代記」としてはまず同王朝 3 世王 (1828~51) のとき、パラマヌチット親王 (Somdet Phra Paramanuchit) が校訂し、後に米人宣教師ブラドレー博士 (D. B. Bradley) が印刷出版した「王朝年代記 (Phraratcha Phongsawadan)」¹⁾におさめられている Ratanakosin 王朝 1 世王の即位からその治世第10年すなわち小歴1154年、子年・第4年²⁾ (1792), までの記述をあげることができる。

この「年代記」の成立した時期については最近異説が出されているが³⁾, いま通説にしたがってその原本成立の年を1840年とすると⁴⁾, その後の約30年間, すなわち 3 世王治世の後半から 4 世王の全治世を通じて「Ratanakosin 王朝年代記」の編纂は行われなかったらしい。

(2) 1868年第5世王が登位すると、王はただちに「Ratanakosin 王朝年代記」編纂の必要を感じ、翌1869年 外国総監⁵⁾ Čhao Phraya Thiphakṛawong Mahakosathibodi (Kham Bunnak) に対し、「国家の榮譽, 子々孫々の財宝たらしめるため, 1 世王より 4 世王までの年代記を順次編纂」せよとの勅命を下した⁶⁾。

Thiphakṛawong は勅命を奉じて「年代記」の編纂に着手した。かれは史料として古星家の暦日記である pum をはじめとして、民部省 (Krom Mahatthai), 兵部省 (Krom Phra Kalahom), 録事局 (Krom Alak) などの所蔵する古記録を渉猟すると共に、中国、安南など外国関係の史料については港務省 (Krom Tha) 所蔵の古文書を利用し、さらにバムラップ・ポーラパック親王 (Čhao Fa Maka Mala Krom Khun Bamrap Pṛapak⁷⁾) の協力を得て古記録、古文書を蒐集し、これらの史料にもとづいて 1 世王から 4 世王に至る「Ratanakosin 王朝年

1) この年代記については、拙稿:「タイ語文献について(2)」『東南アジア研究』第2巻第1号, 1964, p. 14f および p. 21f 参照。

2) Pi Chuat (子年) Čhattawasok (第4年)。タイの暦法については Antoine Cabaton: "Calendar (Siamese)", *Encyclopaedia of Religion and Ethics* (ed. by J. Hastings, 1910) Vol. III p. 135f. が詳しい。

3) 上掲の拙稿 p.21 参照。

4) Petithuguenin, P. "Notes critiques pour servir a l'histoire du Siam", *BEFEO* 16, 1916. p.5

5) Phu Samret Ratchakan Nana Prathet の訳。

6) Thiphakṛawong, Čhao Phraya. *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi* 1 B.E. 2478 (1935). p.4f.

7) のちの Čhao Fa Krom Phraya Bamrap Pṛapak

代記」を撰述した。Thiphakṛawong はこうして完成した「年代記」をまず協力者のバムラープ親王に示してその校閲を求めた。同親王はこれを閲読の上 5 世王に奉呈した。5 世王は自らこの年代記に加筆訂正を行ったのちアクソーンサーンソーボン親王 (Krommamūn Aksṛnsansophon) はか専門家の手にお下げ 渡しになりかさねて校閲訂正を命じられた。この年代記はその後さらに録事局において Phraya Sisunthṛawohan および Luang Sanphrasoet の手で正書法の誤りを訂正されようやく 完成を見た⁸⁾。Thiphakṛawong の撰になるこの「年代記」は Samut Thai で 100 巻をかぞえると言われるが、すべて王宮の「御文庫 (Hṛ Luang)」に所蔵されたまたま久しく一般の目にふれることはなかった。

(3.1) Thiphakṛawong の「年代記」完成後 50 年を経た 1901 年、教育もようやく一般に普及しはじめ、学問の芽生えを感じとった 5 世王は、「Ratanakosin 王朝年代記」の印刷普及を思い立ち、ダムロン親王 (当時の Krommalūang Damrong Rachanuphap) に対し、かの Thiphakṛawong の「年代記」を上木するにふさわしい姿にととのえるよう命じられた。もともと Thiphakṛawong の「年代記」は 2 年たらずの短時日のうちに 100 巻に及ぶ大冊を、「まことに驚くべき速度をもって (Damrong 親王)」完成させたものであるだけにいろいろと不備の点を蔵しており、5 世王もこれをそのまま印刷に付することは適当でないと考えていたようである。

(3.2) 5 世王の勅命を奉じたダムロン親王は、まずお下渡しをうけた「御文庫」所蔵本から写本を作成したのち、直ちに改訂事業に着手した。そして程なく原本の Samut Thai 12 巻分に相当する「1 世王年代記」の部分の改訂を終え、これをまず第 1 巻として上梓した。

Thiphakṛawong 本改訂の際とった態度について改訂者 Damrong 親王は、Ratanakosin 歴 120 年 (1901) 6 月 21 日付の上奏文の中でこう述べている。⁹⁾

「今回の年代記改訂は、何分にも印刷を急がれたため諸文献との比較検討を充分行うことが出来なかったのであります。(中略)

Thiphakṛawong の撰述した年代記はかの「パラマヌチット親王本王朝年代記」をはじめとして、勅書 (Mai Rap Sang), 命令書 (Tṛng Tra), 上申書 (Bai Bṛk) などを典拠として書かれたものであります。その改訂に際して、わたくしはなによりもまず原意を損わぬことに留意し、削除・加筆は真に止むを得ぬ場合に限りしました。若干の個所においては文意をさらに明確ならしめるため、原文の文体と配列に若干の手を加えました。加筆した個所は、いずれも録事局所蔵の古記録など信憑すべき典拠を得たものばかりであります。」

(3.3) Thiphakṛawong 撰の「Ratanakosin 王朝年代記」はかくして原本完成後 30 年余を

8) 以上の叙述は主として「Thiphakṛawong 本 1 世王年代記」冒頭の原序 (Banphanaek Doem) および「タイ史料集成第 4 巻」の巻頭にのせられた Damrong 親王の序文 (“Tamnan Nangsū Phraratcha Phongsawadan”) *Phrachum Phongsawadan phak thi* 4, B.E. 2458 (1915) に基く。

9) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi* 1 B.E. 2478 (1935). p.323.

พระราชพงศาวดารกรุงรัตนโกสินทร์ รัชกาลที่ ๑

สร้างกรุงรัตนโกสินทร์

พระราชพงศาวดารกรุงรัตนโกสินทร์นี้ เริ่มต้นแต่ปีชาล
จัตวาศก จุลศักราช ๑๑๔๔ ปี^๑ เมื่อพระบาทสมเด็จพระบรมบพิตร
พระเจ้าอยู่หัว พระองค์เป็นปฐมในพระบรมราชวงศ์ปัจจุบันนี้
ได้ทรงรับอัญเชิญของเสนามาค้ำราชฐานทั้งหลาย เสด็จเถลิง
ถวัลยราชสมบัติครอบครองสยามประเทศ และทรงปราบปราม
ความจลาจลในกรุงธนบุรีเรียบร้อยแล้ว จึงทรงพระราชดำริว่า
เมืองธนบุรีนี้ ฝั่งฟากตะวันออกเป็นที่ชัยภูมิดีกว่าฟากตะวันตก
โดยเป็นที่แหลมมีลำแม่น้ำเป็นขอบเขตอยู่กว่าครึ่ง ถ้าตั้งพระ
นครข้างฝั่งตะวันออก แม่น้ำลำคึกกมาติดถึงงานพระนครก็จะค่อ
สู้ป้องกันได้ง่ายกว่าอยู่ข้างฝั่งตะวันตก ฝั่งตะวันออกนั้นเสียแต่
เป็นที่ลุ่ม เจ้ากรุงธนบุรีจึงได้ตั้งอยู่ฝั่งตะวันตกซึ่งเป็นที่ดอน แต่ก็
เป็นที่ท้องคึกน้ำเขาสทึงอยู่เสมอไม่ถาวร พระราชทานแว่นม่น

๑ พ.ศ. ๒๒๒๕.

Damrong 親王改訂 Chao Phraya Thiphakrawong 本「1 世王年代記」の一部

経た1901年、Damrong 親王の改訂によりようやくその最初の一部が「1 世王年代記」として上梓され、ここにはじめて一般読者の目にふれることとなったのである。今1935年の再版本についてその内容をみると、この年代記は仏歴2325年（1782）から2352年（1809）にわたる編年体の年代記で、巻頭に年代順の詳細な目次が付されており、末尾には112頁に上る事項別索引が付され内容の検索の便がはかられている。Nangsū Chaek として上梓されたものであるが相当部数印刷されたものと見え、後述する各王年代記中入手が最も容易なもののひとつである。さらに1960年には Qngkan Kha khong Khurusapha から「タイ語文叢書 (Nangsū Chut Phasa Thai)」のひとつとして刊行され入手は益々容易になった。またこのほかに1962年にはバンコクの Khlang Witthaya 書店から、後述の「2 世王年代記ダムロン親王本」と合本で出版された。

(4.1) Damrong 親王の校訂による「Thiphakrawong 本1 世王年代記」の出版に引続い

て、2世王以降の年代記校訂本の出版が期待されたが、その後10数年間この年代記の続篇はついに現われなかった。こうした出版遅延の事情につき Damrong 親王は、1916年ようやく出版の運びとなった「2世王年代記」の序文の中で次のように説明している¹⁰⁾。

「(「1世王年代記」の出版に) 引きつづき、いざ「2世王年代記」の改訂にとりかかってみると、よるべきものは Thiphakṇawong 本ただ一本、しかもこれがまことに杜撰な書であることがわかった。2世王の治世に関する史料不足もさることながら、何はともあれ本書が倉皇の間に成されたものであるという事情が災しているのであろう。そこでわたしは、Thiphakṇawong 本の改訂本を上梓するだけでは読者を裨益するところすくないばかりか、陛下の御聖旨にも沿う所以ではないと考えるに至った。2世王の治世に関する史料は、タイ語外国語のいずれについてもまだ渉獵の余地があると確信したわたしは、爾来もっぱら関係文献の蒐集に時を費し、その結果として「年代記」改訂の作業は一時中絶することとなってしまったのである。」

こうした Damrong 親王の慎重な態度に対し「年代記」続篇の出現を期待する声は読書階級の中から次第に高まって行ったようである。Damrong 親王はさらに語をついで次のようにのべている¹¹⁾。

「しかしながらこの間といえどもわたしはただいたずらに手を拱いて時の移り行くのを傍観していた訳ではない。機会ある毎にバンコックはもとより諸地方へも足を延ばして新史料の発見につとめその結果2世王関係の古文書多数を入手することが出来た。しかしわたしは「年代記」の改訂には手をそめなかったのである。

仏歴2457年(1914)、寅年・第6年、ワチラヤーン親王(Krom Phraya Wachirayan Warorot)はわたしをうながしてこう言われた。「王朝年代記」というものは国家にとってまことに重要な典籍ではあるが、同時にその編纂は専心これに没頭しうる人を得て初めてよく成しうる類の書物である。しかしたとえ完璧を期し得ぬにせよ、ひとまずこれに形を与えておけば、ただそれだけでも世を裨益するところ少なからぬものがあるだろう。わたしは親王のこの考えに同意して、先に公にした「1世王年代記」に引続き「2世王年代記」の改訂続行を決意したのであった。偶々その頃王妃陛下より Wachirayan 文庫委員会に対し、小歴1276年(1914)この世を去るまで陛下がことの外御寵愛になられた Mqm Rachawong Ying Paeo Mala kun Na Krungthep (Krommamūn Prapṇapak の娘)の葬儀に際し引出物として印刷頒布するにふさわしい書物を選択して上奏するようにとの御下命があった。思うに Malakun 家は Chakri 王家、とくに2世王の流を汲む家系であるが、さらに Thiphakṇawong の撰した「年代記」の序文には故人の祖父にあたる Krom Phraya Bamrap Pṇapak が校閲の勞をとりその編纂に協

10) Krom Phra Damrong Rachanuphap: *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi2*. B.E. 2459 (1916). p.1f.

11) *ibid*, p.2f.

力したとあることからしても、その葬儀に「2世王年代記」を頒布することは誠に時宜にかなうと考える旨奏上した。王妃陛下はわたしの意見を御嘉納になり、「Ratanakosin 王朝年代記」は5世陛下が刊行を思い立たれてすでに久しい書物であるから、今回これを上梓できれば陛下の御遺志を継ぐ所以でもあると直ちに改訂に着手するようとの御下命があった。仏歴2457年(1914)、寅年・第6年、わたしは改訂に着手しこの度これを完了したのである¹²⁾。」

(4.2) 仏歴2459(1916)出版された Damrong 親王「改訂」の「2世王年代記 (Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 2)」はA 5版よりやや大きめ、1頁21行組で 434p. というかなりの大冊である。極く最近印刷に付された Thiphakqrawong 本¹³⁾ とくら

Damrong 親王本「2世王年代記」の一部

พระราชพงษาวดารกรุงรัตนโกสินทร์

รัชกาลที่ ๒

สมเด็จพระเจ้าอยู่หัวรัชกาลที่ ๑ สวรรคต

มีมเด็จพระเอกศก พระบาทสมเด็จพระพุทธยอดฟ้าจุฬาโลก^๑ เสด็จ
 จุล ๑๑๘๑ สวรรคตที่พระที่นั่งสุทไธสวรรย์ ซึ่งทุกวันนี้เรียกว่าพระ
 พ. ศ. ๒๓๕๒ ที่นั่งโศกตักษณ เมื่อวันพฤหัสบดีที่ ๘ เดือน
 กันยายน พ. ศ. ๒๓๕๒ ตรงกับวันทางจันทรคติ เดือน ๘
 แรม ๑๓ ค่ำ มีมเด็จพระเอกศก จุลศักราช ๑๑๘๑ (คฤศก
 ศักราช ๑๘๐๑) สมเด็จพระบรมโอรสาธิราชกรมพระ
 ราชวรมหาสมณมกุฎ (คือ พระบาทสมเด็จพระพุทธ
 เลิศหล้านภาลัย) ได้สำเร็จราชการแผ่นดิน โดยสมเด็จพระ
 พระบรมชนกนาถ ได้ทรงประดิษฐานไว้ในที่พระมหา
 อุปราชมุขมัยราชายาท

๑ พระนามนี้ ถวายค่อเมื่อในรัชกาลที่ ๑ จะปรากฏคำอธิบาย
 ค่อไปข้างหน้า ในค่อนพระราชพิธีบรมราชาภิเศก

12) loc. cit.

13) 後述 p.72 参照。

べると約2倍近い分量となっている。両者の相異は単に量のみにとどまらず、Thiphakṛawong 本があくまでも「年代記 (Phongsawadan)」に留まっているのに対し、Damrong 本は同じく「年代記」と称しつつも、むしろ「歴史 (Prawatisat)」を指向しているものと言えよう。この点に関し Damrong 親王の次の言葉は興味深いものがある¹⁴⁾。

『1世王年代記』の改訂にあたってわたしが目指したのは、まず原本の内容を校閲し読者の理解を容易にするため前後関係をあらためると共に、Thiphakṛawong 本完成後に発見された関係史料を適宜利用して補筆し、原本をより完全なものへと近づけることであった。したがって丑年・第3年(1901)出版を見た「1世王年代記」は Thiphakṛawong 本の原本と大差はなかったのである。

それ以後、今回「2世王年代記」を取りあげるまでの間、わたしは「アユタヤ王朝年代記解説」¹⁵⁾など年代記に関するいくつかの著述を行って来た。そこでわたしの感じたのは、近頃の読者は何が起ったかということと合せて、その生起した事件についての判断 (khṇ winitchai) を求める、つまり言葉をかえて言えば、年代記に記載された事件の因果関係の考察に興味を示すようになり、以前のようにただ読み流して事足りりとはしなくなったということである。けれどわが国にもようやく学問の萌芽が現れはじめたというべきか。そこで今回の「2世王年代記」の編述にあたって、わたしは読者の判断をたすけ事件の因果関係を理解できるようにする点を心掛けた。その結果として、体裁と言い、文体と言いききの「1世王年代記」とは趣を異にした全くの新著とも言うべきものが出来上がった。とわ言え、その内容はあくまでも Thiphakṛawong 本に基いたものであることは言うまでもない。ただもとの記述が誤りであるとの証拠を得た個所については、新発見の史料を用いて力の許すかぎりこれを完全なものへと近づけるよう努力した。」

以上の説明からもあきらかなように、本書は Damrong 親王による Thiphakṛawong 本の「改訂本」というよりはむしろ「Damrong 親王本」と称すべきものである¹⁶⁾。

なお1961年、前にふれた Qngkhan Kha khṇg Khurusapha の「タイ語文叢書」の一巻として Thiphakṛawong 本「2世王年代記」が刊行され、Damrong 親王本の Urtext の全貌がはじめてあきらかにされた。本書は序文を欠き、校訂者の名も校訂の方針も明確でないのは残念であるが、これをもってわれわれは Thiphakṛawong 撰の「Ratanakṣin 王朝年代記」の

14) Damrong, op. cit., p.4f.

15) Krom Phraya Damrong Rachanuphap, "Tamnan Nangsū Phraratcha Phongsawadan", *Phraratcha Phongsawadan chabap Phraratcha Hatthalekha*. Vol.1, pt.1. Bangkok, 1952. pp.1~50.

16) 1962年 Damrong 親王生誕100年祭を記念して出版された「親王御著作目録」にも、本書を同親王の作品の一に数えている。Raichū Nangsū Phraniphon Somdet Phraṇhao Bṛomawongthoe Krom Phraya Damrong Rachanuphap. B.E. 2505 (1962) p.40.

พระราชพงศาวดารกรุงรัตนโกสินทร์

รัชกาลที่ ๒

ฉบับเจ้าพระยาทิพากรวงศ์

ตั้งพระบรมศพสมเด็จพระพุทธยอดฟ้า ฯ
ครั้นรุ่งขึ้นวันศุกร์ แรมสิบสี่ค่ำ เวลาเช้า สมเด็จพระเจ้า
อยู่หัว กรมพระราชวังบวรสถานมงคลพระที่นั่งใหญ่ ก็
สมเด็จพะอนุชาธิราชเจ้าฟ้ากรมหลวงเสนานุรักษ์ ซึ่งดำรงที่
พระที่นั่งน้อย พร้อมด้วยพระราชวงศานุวงศ์ฝ่าย ใน เสด็จ
เข้าไปทรงเครื่องพระบรมศพสำหรับยกขึ้นแล้ว
เชิญพระบรมศพเข้าสู่พระลองเงิน ทำรวแห่ออกประตูสนาม
ราชกิจ เชิญขึ้นพระยานุมาศประกอบพระบรมโกศขึ้นนอก
ทำด้วยทองคำทำหลักกลายกั้นประคองพลอยเนาวรัตน์ พระโกศ
นั้นรับสั่งให้ช่างทองทำไว้แต่ยังไม่ทรงพระประสูติ ด้กระบวน
แต่เชิญไปประคองฐานไว้ ณ พระที่นั่งสุทไธสมหาปราสาทกันมุต

Chao Phraya Thiphakrawong 本「2 世王年代 記」の一部

大部分¹⁷⁾を手にすることが出来ることとなった訳であり研究者にとって大きな福音というべきであろう。

(5.1) 詳細な事情については不明であるが、Damrong 親王は上述した「2 世王年代記」の「改訂」をもって、Thiphakrawong の「年代記」の改訂続行を断念したものの如くである¹⁸⁾。

(5.2) Damrong 親王本「2 世王年代記」出版後18年を経た1934年、Thiphakrawong 本「3 世王年代記」と「4 世王年代記」が相次いで上梓された。刊本の作成には「芸術局 (Krom

17) Damrong 親王改訂本と Thiphakrawong 本「1 世王年代記」との間に内容の異同がどの程度あるかは不明である。

18) 親王の著述活動はその後も 精力的に続けられ 1875年 13才にして早くも文筆活動を開始して以来 1943年 81才の生涯をとじるまでに 長短とりまぜて 実に 453篇に なる著作をのこしている。(前掲「御著作目録」p.9)

พระราชพงศาวดารกรุงรัตนโกสินทร์

รัชกาลที่ ๓

พระบาทสมเด็จพระนั่งเกล้าฯ เสด็จราชย์

ในเวลากลางคืนวันสวรรคตนั้น^{*} พระเจ้าลูกยาเธอ พระองค์ใหญ่เสด็จประทับอยู่ในพระที่นั่งจักรพรรดิพิมาน ฝ่ายเด็จพระนางเจ้าสุทธิดา ด้งกลองมโหรีทั้งชั้นในชั้นนอก และพระราชวงศานุวงศ์ต่างกรมผู้ใหญ่และเสนาบดีและข้าทูลละอองธุลีพระบาทผู้ใหญ่ผู้น้อย นอนประจําอยู่ในพระราชวัง จึงอาราธนาพระสังฆราชพระราชอาคันตุกะผู้ใหญ่ มาแล้ว พร้อมด้วยพระบรมราชวงศานุวงศ์ต่างกรม และท่านเสนาบดีและข้าทูลละอองธุลีพระบาทผู้ใหญ่ ๆ ซึ่งเป็นประธานในราชการแผ่นดิน เห็นว่าพระเจ้าลูกยาเธอพระองค์ใหญ่ กรมหมื่นเจษฎาบดินทร์ ทรงพระสติปัญญาเฉลียวฉลาด ได้ว่าราชการต่างพระเนตรพระกรรณในพระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัวมาช้านาน ทั้งข้าทูลละอองธุลีพระบาทก็มีความจงรักภักดีในพระองค์ท่าน ก็มาก

^{*} หมายถึงคืนวันพุธเดือน ๘ แรม ๑๑ ค่ำ ตรงกับวันที่ ๒๑ กรกฎาคม พุทธศักราช ๒๓๖๘ ซึ่งเป็นวันสวรรคตของสมเด็จพระพุทธเลิศหล้านภาลัย

Chao Phraya Thiphakrawong 本「3 世王年代記」の一部

Sinlapakon)」があたった。当時の芸術局長 Luang Wičhit Wathakan が本書によせた解説によると、あくまでも「原文には手をつけず、時に応じ脚註を付す」¹⁹⁾ことを原則としたものである。そのほか現代の読者の便をはかって日付は太陽暦に換算したものを、また小歴は対応する仏歴をそれぞれ脚註として掲げている。原本の正書法は、*Pathanukrom* (国語辞典) に従って訂正されている。さらに原本にはない段落をもうけ、これに大小の見出しを付した外、巻頭に年次別の詳細な目次をもうけて読者の便をはかっているが、この見出の付し方、段落の設定はやや杜撰のそしりをまぬがれず、利用者は充分の注意を払う必要がある。「3 世王年代記」には仏歴2367年(1824)第2世王の崩御から仏歴2394年(1851)3世王の崩御ま

19) Luang Wičhitwathakan, "Kham Athibai", *Phraratcha Phangsawadan Krung Ratanakosin chabap Ho Samut haeng Chat, Ratchakan thi3, thi4*. 1963, p.4.

での記述が含まれており、「4 世王年代記」は仏歴2394年（1851）の Mongkut 親王の Bq-wonniwet 寺院御出立から仏歴2411年（1868）4 世王の遺体の灌水の儀（Song Nam Phrabaroma Sop）までを編年体で叙述している。

なお3 世王年代記には巻末に68頁におよぶ詳細な事項索引が付されている。

上記の2 書はいずれも Nangsū Čhaek として出版されたため従来入手はやや困難であり、とくに「4 世王年代記」は稀覯本として高値を呼んでいたが、1961年いずれも「タイ語文叢書」として刊行されたほか、1963年には Bangkok の Khlang Witthaya 書店から3・4 世年代記の合本が出版され、現在入手はきわめて容易となっている。

(6.1) Thiphakqrawong の Ratanakosin 王朝年代記は、短時日の間に書き上げられたものであるため種々不備な点を内蔵していることは上述のとおりであり、また著者の Čhao

Chao Phraya Thiphakqrawong 本「4 世王年代記」の一部

พระราชพงศาวดาร กรุงรัตนโกสินทร์ รัชกาลที่ ๔

อัญเชิญสมเด็จพระอนุชาธิราช เจ้าฟ้ามงกุฎ ๑
เสด็จจากวัดบวรนิเวศ

ที่จะกล่าว ในแผ่นดินพระบาทสมเด็จพระ ๑ พระจอมเกล้า
เจ้าอยู่หัว ต่อไป

ลุศักราช ๑๒๑๓ ปีกุน ตรีศก เป็นปีที่ ๑ ครั้นรุ่งขึ้นวัน
พฤหัสบดี เดือน ๕ ขึ้น ๒ ค่ำ เวลาเช้า เจ้าพระยาพระคลัง
ว่าที่สมุหพระกลาโหม พระยาราชสุภาวดี ว่าที่สมุหนายก กับ
ข้าราชการผู้ใหญ่ผู้น้อยพร้อมกันเป็นอันมาก พวกนั้นออกไปเชิญ
เสด็จพระบาทสมเด็จพระอนุชาธิราช เจ้าฟ้ามงกุฎสมมุติเทว
วงศ์ พงศอัครกษัตริย์ ซึ่งสถิตณวัดบวรนิเวศวิหารพระอาราม
หลวง แต่บรรดาราษฎรทั้งปวงก็นิยมชมชื่นวันเวียงร้องฮวยไชย
ถวายพระพร ตั้งเครื่องสักการบูชา เก็บดอกไม้ไปเฝ้ารายไว้ตาม
สถลมารคเป็นอันมาก ข้าราชการผู้ใหญ่ผู้น้อย หม่อมครุฑแห่ง

๑ พ.ศ. ๒๓๗๔ ๑ ๒ วันที่ ๑ เมษายน ๑

Phraya Thiphakṇrawong が専門の歴史家でないという点よりしてその利用にあたっては充分の注意が肝要であるが、それにもかかわらず本書は現存する唯一の官撰の「Ratanakosin 王朝年代記」であること、後述のように著者が同時代人で且長期に亘って政府の要職を占めていたということから見て、Ratanakosin 王朝史の研究者のまず第一に徴すべき重要文献と言うべきものである。

(6.2) 以下に著者の Thiphakṇrawong の略伝を記して読者の参考に供したい。

Čhao Phraya Thiphakṇrawong 小伝。

Čhao Phraya Thiphakṇrawong(1812-1870) は本名を Kham Bunnak といい名門 Bunnak 家の一門である。父は 3 世王のとき兵部長官 (Samuha Phra Kalahom) と港務卿 (Senabodi Krom Tha) すなわち国防・大蔵・外務の最高責任者として国政を左右した Somdet Čhao

Čhao Phraya Thiphakṇrawong の肖像



เจ้าพระยาทิพากรวงศ์ (จำ บุนนาค)

Phraya Barommaha Prayurawong (Dit Bunnak) であり 4 世王の兵部長官、のち若年にして即位した 5 世王の摂政をつとめた Somdet Čhao Phraya Barommaha Sisuriyawong (Chuang Bunnak) はかれの異母兄にあたる。

3 世王のとき宮内官をふり出しに Čhamün Rachamat となる。1851 年 Čhao Phraya に叙されると共に港務卿補佐となり、重要な国政に参与することになった。こうしてタイの「開国期」の最も重要な時代の約 13 年をもっぱら 対外接衝に活躍した²⁰⁾。また内政面でも Khløng Mahasawat, Khløng Čhedibucha, など大運河の開さくを行い、また Phra Pathom Čhedi の

Damrong 親王本「5 世王年代記」の一部

พงศาวดารกรุงรัตนโกสินทร์

รัชกาลที่ ๕

ตอนที่ ๑

พระบาทสมเด็จพระจุลจอมเกล้าเจ้าอยู่หัว
เสด็จเถลิงถวัลยราชสมบัติ

พระบาทสมเด็จพระปรมินทรมหาจุฬาลงกรณฯ พระจอมเกล้าเจ้าอยู่หัว เสด็จสวรรคตเมื่อ
ณ วันพฤหัสบดี เดือน ๑๑ ขึ้น ๑๕ ค่ำ มีพระโอรสธิดา ๑๖๖ พระพุทธศาสนา—
การดังเดิมนั้น ๒๔๑๑ พระบาทสมเด็จพระนั่งเกล้าเจ้าอยู่หัว เสด็จสวรรคต
ศักราช ๒๓๖๘ นับวันเป็นต้นรัชกาลที่ ๕ ในพระบรมราชจักรีวงศ์ ซึ่งได้ประดิษฐานดำรง
กรุงเทพมหานคร สมรรัตนโกสินทร์ มหินทรายุธยา เป็นราชธานีแห่งสยามประเทศได้ ๑๖ ปี
โดยนิมิต

พระบาทสมเด็จพระจอมเกล้าเจ้าอยู่หัวประสูติพระโอรสโอรส (๑) เพราะเหตุนี้จึงไป
ทอดพระเนตรดูพระโอรสที่วัดบวรนิเวศราชวรวิหาร เมืองพระนครรัตนโกสินทร์ เสด็จกลับ
มาถึงกรุงเทพฯ ได้ ๕ วันก็เกิดพระอาการประชวรไข้ เมื่อ ณ วันพุธ เดือน ๑๑ ขึ้น ๑ ค่ำ ค่ำ
แต่ขึ้นประชวรไข้ไม่ช้า พระองค์ทรงทราบโดยพระอาการว่า ประสูติครั้งนั้นเห็นจะเป็นที่
สุดพระชนมายุถึงจวน ได้ตรัสแก่สมเด็จพระเจ้าลูกยาเธอพระองค์ใหญ่ เจ้าฟ้าจุฬาลงกรณ์
กรมขุนพิริยชนาถให้ทรงทราบ (๒) ทรงพระราชดำริถึงพระราชประสงค์และพระราชทาน
พระบรมราโชวาทแก่สมเด็จพระเจ้าลูกยาเธอ เจ้าฟ้าฯ กรมขุนพิริยชนาถแล้ว จึงมีรับ

(๑) หม่อมบริกได้ตรวจพระอาการว่าประชวรไข้

(๒) ข้อนี้เรียบเรียงตามพระบาทสมเด็จพระจอมเกล้าเจ้าอยู่หัวทรงดำริ

20) Damrong 親王はかれを 4 世王最初の外務大臣として紹介している。(Chow Phya Dibakarawongse was the first Minister for Foreign Affairs under King Mongkut, who ascended the Throne in 1851. [H.R.H Prince Damrong, "Introduction", *Historical Sketch of Protestant Missions in Siam*, 1828-1928. ed. by G.B. McFarland. Bangkok, 1928] p.8)

修復等の大事業を完成する等大いに功績をあげたが、のち眼病を患って官を辞した。しかし1868年即位した5世王はかかる遺賢の野に埋もれるを惜しみ、再び Thiphakṛawong を登用し、Phū Kamkap Ratchakan (総監) の職に補し、港務省の監督を命ずると共に、国政一般についての諮問役たる国家参与(Thi Prūksa Khit Au Ratchakan Phaendin) に任じた。5世王が Thiphakṛawong をいかに重用したかについては、Čhao Phraya として通常与えらるべき Sakdina 10,000 Rai に倍する 20,000 Rai の Sakdina を与え、特に Somdet Čhao Phraya に等しい待遇を与えられたことを見ても容易に推察されよう。1870年58才をもって世を去った。かの年代記はしたがってかれのもっとも晩年の作品である²¹⁾。

(7.1) Thiphakṛawong の「Ratanakosin 王朝年代記」とならんで官撰年代記の地位を与えられるべきものに Damrong 親王の未完の作品「5世王年代記 (Phraracha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 5)」がある。これは同親王が1932年の立憲革命後難をさけてペナンに滞在されていたときの著述といわれ²²⁾長らく Bangkok の Damrong 文庫に原稿が保存されていたものであるが、親王の歿後1950年 Adisai Suriyapha 親王還歴の祝賀の引出物として印刷に付された。未完結であることが何としても惜しまれる。

本書執筆のいきさつにつき、Damrong 親王はかつて令嬢の Mqm Čhao Ying Phun Phitsamai Ditsakun に対し、5世王がまだ御存世のころ、陛下は自分に向って朕の年代記を書くのは誰であるかとおたずねになったが、自分はその時わたくしが書きたいと思っておりますとお答えしてしまったことがある。そのときの陛下とのお約束を果すため筆をとったのであると洩らしたとのことである²³⁾。しかしながら5世王の治世は他の諸王とくらべ著しく長く42年にも及んでいること、またこの時代程変転の激しかった時代も他に例を見ないのでそのすべてを網羅することは到底一個人の力にあまるとし、対象をまず初期の、他に参考文献のもとめにくい時代のみに限定し、記述の方法も Thiphakṛawong のよった編年体をとらず、12の項目を選び、その各々について記述する方法をとっている。1950年の初版本はこれまで刊行された1～4世年代記よりかなり大型でB5版をやや大きくした形である。

本章の内容は次のとおりである。

第1章 5世王の踐祚

第2章 5世王御踐祚までのこと

第3章 副王

21) Čhao Phraya Thiphakṛawong については

(イ) *Rūang tang Čhao Phraya Krung Ratanakosin chabap mi Rup*. B.E. 2474 (1931) pp.60～62.

(ロ) "Phu Borihan Ratchakan Phaendin Samai Adit". *Rūang thiaw thi tang tang phak 2* B.E. 2505 (1962) pp.65～118 参照。

22) Somdet Krom Phraya Damrong Rachanuphap, *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 5*. B.E. 2493 (1950). p. kṛ (=p.i)

23) loc. cit.

第4章 摂政

第5章 御即位式

第6章 首都御巡幸

第7章 副王即位式

第8章 叙位叙勲

第9章 宮中諸制度の改革

第10章 対外関係

第11章 5世王治世の初頭にとられた非常措置のこと。

第12章 初期における外国使臣の接受と条約の締結

(8) 以上紹介して来た Ratanakosin 王朝年代記の各種刊本を以下にまとめて掲げ、利用者の参考に供したい。

[A] Darong親王改訂 Čhao Phraya Thiphakṛawong 撰「1世王年代記」

(i) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 1* B.E. 2444 (1901), B.E. 2478 (1935) xiv+112p. [nangsū čhaek]

(ii) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 1 khong Čhao Phraya Thiphakṛawong*, Qngkan Kha khong Khrusapha: Bangkok, B.E. 2503(1960). 362+133p.

(iii) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin chabap Hṛ Samut haeng Chat: Ratchakan thi 1-Ratchakan thi 2*, Samnak Phim Khlang Witthaya: Bangkok, B.E. 2505 (1962). pp. 1-326.

[B] Damrong 親王著「2世王年代記」

(i) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 2, Phrachao Baromawongthoe Krom Phra Damrong Rachanuphap song nippon*. B.E. 2459 (1916). xli+434p. [nangsū čhaek]

(ii) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin chabap Hṛ Samut haeng Chat: Ratchakan thi 1-Ratchakan thi 2*, Samunak Phim Khlang Witthaya: Bangkok, B.E. 2505 (1962). pp. 327-753.

[B'] Čhao Phraya Thiphakṛawong 撰「2世王年代記」

(i) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 2 khong Čhao Phraya Thiphakṛawong*, Qngkan Kha khong Khrusapha: Bangkok, B.E. 2504 (1961). 206p.

[C] Čhao Phraya Thiphakṛawong 撰「3世王年代記」

(i) *Phrartcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 3, Phṛ Sṛ* 2367-

2394 *chabap Čhao Phraya Thiphakorawong*. B.E. 2477 (1934), B.E. 2481 (1938) xxx + 443 + iii p. [nangsū čhaek]

(ii) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 3 Khong Chao Phraya Thiphakorawong*. Qngkan Kha kong Khrusapha: Bangkok, B.E. 2504(?) [未見]

(iii) *Phrartcha Phongsawadan Krung Ratanakosin chabap Hø Samut haeng Ratchakan thi 3-Ratchakan thi 4. Chat*: Samnak Phin Khlang Witthaya: Bangkok, B.E. 2406 (1963). pp. 1+370.

(D) Čhao Phraya Thiphakorawong 撰「4世王年代記」

(i) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 4 Phø Sø* 2394-2411 *chabap Čhao Phraya Thiphakorawong*. B.E. 2477 (1934) xxxi+482p. [nangsū čhaek]

(ii) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 4 khong Čhao Phraya Thiphakorawong 2 Vols.* Qngkan Kha khong Khrusapha: Bangkok, B.E. 2504 (1961). vol. 1: xiii+251p. Vol. 2: xxii+270p.

(iii) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin chabap Hø Samut haeng Chat: Ratchakan thi 3 - Ratchakan thi 4.* Samnak Phim Khlang Witthaya: Bangkok, B.E. 2506 (1963). pp. 373-840.

(E) Damrong 親王著「5世王年代記」

(i) *Pharatcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 5.* B.E. 2493(1950). kho-88p. [nangsū čhaek]

(ii) *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan thi 5, Phranipon Somdet Phračhao Baromawongthoe Krom Phraya Damrong Rachanuphap.* Qngkan Kha khong Khrusapha: Bangkok, B.E. 2504(1961). kho-379p.

参 考 文 献

上記8)に掲げたもののほかに

- 1) Krom Phraya Damrong Rachanuphap: "Tamnan Nangsū Phraracha Phongsawadan", *Phrachum Phongsawadan phak thi 4*. B.E. 2458(1915). pp.i+ix (kø-sø)
- 2) *Ruang tang Čhao Phraya Krung Ratanakosin chabap mi Rup.* B.E. 2474 (1931). viii+199p.
- 3) "Phu Borihan Ratchakan Phaendin Samai Adit". *Ruang thiaw thi tang tang phak thi 2*. B.E. 2505(1962) pp. 65-118.
- 4) *Raichu Nangsū Phranipon Somdet Phračhao Baromawongthoe Krom Phraya Damrong Rachanuphap.* B.E. 2505(1962) 67p.